

# Critical Cycling展2016

湯澤大樹

## 1. はじめに

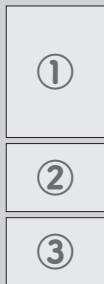
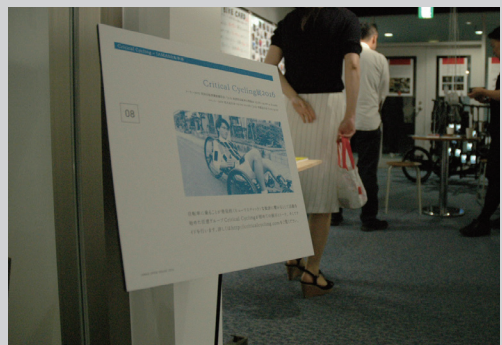
2016年7月30日・31日、IAMASオープンハウスにて開催された「Critical Cycling展2016」は、中日新聞に掲載されるなど、多くの方々から賞賛を頂き、無事に幕を閉じた。展示や座談会を通し、足を運んで頂いた方々と交流を深め、実に有意義な時間を過ごすことができた。それも、「自転車」という誰もが知っている、日常の中にあまりにも当たり前のようにあるものを通じて。

## 2. ミーティング

クリティカル・サイクリングの立ち上げからおおよそ一ヶ月後の6月2日にミーティングが行われた。その席では、オープンハウスを1つの節目として、どのような事を行うかが話し合われた。オープンハウスは例年、外部から多くの入場者があるので、パブリックな場で外部に活動を示すために、良い機会となる。しかし、当時はウェブサイトも、ロゴマークも、作品も何もない。ゼロからのスタートで、まさに手探り状態といった感じであった。

オープンハウスで「Critical Cycling展2016」を開催するにあたり、ミーティング参加者から次々にアイデアが湧き上がった。「来場者に活動を知らせること」「来場者が楽しめること」「来場者と主催者が交流すること」この3つを軸として、内容の選定を行った。

まずはクリティカル・サイクリングの活動を知らせるために、「クリティカル・サイクリング宣言」を掲げることとなった。これは何を行い、何を目標しているのかというマニフェストである。来場者が楽しめる展示にするために、それまでに収集した自転車関連の情報や画像を、小型のカードとしてボードに貼り、展示する案が出された。また、iPad touch 100台をリカンベント・トライク（寝そべって漕ぐ三輪型自転車）に取り付けて、インカメラで録画したものを展示するアイデアも出された。来場者との交流としては、ライド用補助食の試食やお茶会、ライド・イベントやトーク・ショーを行うことが決まった。この日をスタートとして、メンバーが力を合わせ、開催に向けて展示の準備が始まった。



- ①② 展示概要パネル
- ③ シンボル・マーク

### 3. 展示会1日目

7月30日土曜日、天候は晴れ。早朝から多くの人が慌ただしく動き回り、最後の準備に追われていた。開幕とともに、次々と来場者が訪れる。

Critical Cycling展2016の展示エリアに入った来場者の目を最初に引いたのは、赤松正行の作品「The Ridable City」(④⑤)だ。これは、自転車に乗ってペダルを漕ぎながらヘッドマウント・ディスプレイ(HMD)で全天周映像を体験する作品で、ロンドンや大垣の街中をあたかも自分自身が自転車に乗って走っている感覚に陥る。体験者はHMDの中の映像で、街の中の曲がり角に差し掛かると、実際にハンドルを切ってしまうほど、視覚情報に身体の動きを反応させた。

その横には自転車関連書籍の展示スペース(⑥)があり、IAMAS附属図書館と個人が所有する自転車関連の書籍やパンフレットに多くの人が足を止める。

奥では、バイク・カードの展示(⑦)があり、壁一面を覆い尽くすマグネット・カードには多様な自転車関連の情報と、より詳しい情報が得られるQRコードが印刷されてある。来場者の観点で3枚選択したものを写真に撮って展示することで、異なる基準を話題とし、交流のきっかけとなった。

中央には、テーブルセットが設置され、手作りエナジーバーとコーヒーが振舞われた。談話スペースを設けたお陰で、来場者と自転車や学校についてゆっくりと話し合うことができた。

一番奥には、綿貫岳海・湯澤大樹によるリカンベント・トライクに複数台のiPod touchを設置した作品「Divergence of Vision」(⑧)と、同作品の映像が壁に映し出される。リカンベント・トライクに設置された各端末のインカメラで捉えた映像にタイムラグが生じる作品で、子どもから大人まで作品の前で思い思いのポーズをとって楽しんでくれた。

午後からはトーク・イベントも開催した。「Bicycle in the UK (英国自転車調査報告会)」(⑨)では、Cycle Revolution (自転車革命)のスローガンのもと革新的な都市施策と文化育成が進むロンドンを中心に、6月に調査を行ったイギリスの自転車事情の報告が行われた。参加者を交えながら、自転車に対する多くの議論が展開され、盛り上がった。

展示終了後は「Fireworks Ride (花火走行会)」と称し、揖斐川で開催される第60回記念大垣花火大会会場に向けて周辺を5km程度のライドを行い、目の前に広がる大輪を楽しみ、1日目は終了したのである。



- ④⑤ The Ridable City
- ⑥ 書籍コーナー
- ⑦ バイク・カード
- ⑧ Divergence of Vision
- ⑨ Bicycle in the UK

④	⑤
⑥	⑦
⑧	⑨





⑩

⑩ Critical Cycling Open Meeting

⑪

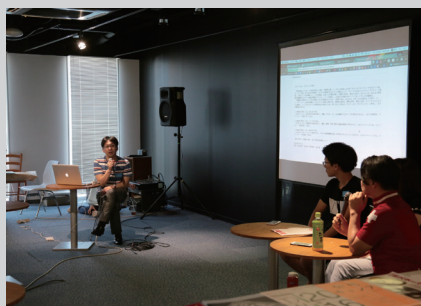
⑪ 2017年1月時点のトライク作品

⑫

⑫ 来場者との談話

⑬

⑬ 作品の説明



#### 4. 展示会2日目

2日目も、朝から汗がにじむほどの快晴で、早朝より「Morning Ride（早朝走行会）」が行われた。関東から夜行電車で駆けつけた参加者も同行して、IAMAS周辺を約1時間20km程度のライドを行った。道中の喫茶店に入り、この地域特有のモーニングに舌鼓を打ちながら、参加者同士の交流を深めることができた。

1日目に続いて展示を行い、午後からは再びトーク・イベントを開催した。「Critical Cycling Open Meeting（批評的自転車公開集会）」（⑩）では、クリティカル・サイクリングとは何か？何を狙っているのか？という大命題のもと、自転車と関連する芸術、文化、地域、政策などをめくって、初めての公開ミーティングを行った。海外からの参加者も交え、様々な議論が展開される有意義な時間となった。こうして、多くの来場者を得て、クリティカル・サイクリングについての意見交換を行いながら、2日間の展示は無事に終了した。

#### 5. トライク作品での取り組み

自転車に乗っている自分の姿を見ることは多くはない。また、自身の背後からの姿を見ることもない。誰かにカメラで撮影をしてもらえば可能であるが、360度あらゆる視点から一度に自分の走行中の姿を見ることができたらどうであろう。人の癖や姿形が十人十色であることと同じ様に、自転車に乗る姿も人それぞれである。自分のことは自身がよくわかっていて、これが意外と知らずにいる。自分をあらゆる視点から客観視することができれば、自身の癖や身体の動きを知り、それがきっかけで今までの価値観ですら変わってしまうかもしれない。そう考えただけでワクワクする。だから、ミーティングの時に誰かが口にした「iPod touch100台をリカンベント・トライクに付ける」というアイデアを形にするために、幾度と失敗を重ねながら制作を続けている。

これまでに自転車題材とした作品は多く存在する。19世紀から存在する自転車と、最新の技術を組み合わせる時に何が生まれるか。もしくは何も生まれないのか。それを自身の目で見て体験したい。その様なことに想いを馳せながら、ギネス認定を目指しながら制作は未だ道半ばである。

#### 6. クリティカル・サイクリングを通じて

日常にありふれた「自転車」を通じて、この数ヶ月の間に言葉にできない程の素晴らしい体験と、多くの人との繋がりを得ることができた。それは、Critical Cycling展2016を終えた現在も尚、続き、広がっている。

自転車に乗っていると、人生の様なものだと感じる事が度々ある。急げば疲れるし、疲れれば止まる。左右や後ろにまで注意を払わなければ事故を起こす。前を走る背中を追いかけて続け、信頼をしていけば近づくし、そうでなければ距離をとる。自分が前に出る時は風を遮り背後に配慮の気持ちを向ける。走り続けるその先には目的地がある。

だから私たちは走り続ける。クリティカルし続けながら。